

農村部の生活を支えた えんぶり組

小林 力

(八戸市博物館
主査兼学芸員)

えんぶりは年の初めに豊年満作を願って演じる田植踊りの一種で、八戸市をはじめ三八上北地方や岩手県北部で伝承されている。えんぶり組は主に地域単位で組織され、子どもから高齢者まで様々な世代がともに演じることから、

コミュニティの結束や世代間交流を促す役割も担っている。

例年、2月17日から20日まで八戸市内で「八戸えんぶり(別名豊年祭)」が開催される。2026(令和8)年は八戸市内外の34組が参加し、奉納や各種公演などが行われた。国内外から大勢の観光客が訪れる八戸を代表するお祭りである。

えんぶりの歴史は古く、1715(正徳5)年の八戸藩日記に、

すでに記載されている。明治時代になると旧来の悪習として禁止されたが、元八戸藩士らが尽力し、

長者山新羅神社の豊年祭として再興が認められた。これ以降、えんぶりは災害や戦争、コロナ禍を乗り越え現在まで続いている。

えんぶりの中核的役割を担ってきた新羅神社の文書のなか

と苗取の町村調」がある(八戸市立図書館所蔵)。この調査によると、

1892(明治25)年から1928(昭和3)年までの36年間に、現在の八戸市・南部町・階上町・五戸町・三戸町の範囲から、127組ものえんぶり組と苗取組が豊年祭に参加していたことがわかる。苗取とは烏帽子を被らず、苗を取る様子を演じる芸能で、かつてはえんぶり組と共に豊年祭に参加していた。

旧町村単位で多い所は、館村15組・大館村12組・八戸町11組・下長苗代村9組(以上、現八戸市)、田部村9組・名久井村8組(以上、現南部町)、豊崎村8組(現八戸市と五戸町)が挙げられる。

これほど多くの組があった理由に、地区住民が共同利用する物品の財源を、豊年祭期間中の門付けで稼いでいたことが挙げられる。えんぶりにおける門付けでは、マチ場に住む商家やハマの網元等を訪れ、豊年祈願の舞を演じ、ご祝儀を頂いた。

類家えんぶり組の昭和中期の帳簿類(当館所蔵)には、ご祝儀で会席膳や布団などが大量に購入され、それらを地区住民に貸し付けていたことが記されている。住民の主な借用目的は冠婚葬祭だった。ほかにも類

家地区の共有財産を保管する郷倉の整備費用もえんぶり組が賄っていた。

かつて農村部では現金収入が少なかったため、門付けで得られる現金は貴重だった。類家地区のようにえんぶり組が共有財産を購入する慣行は八戸市内で広く見られ、地域社会を下支えする役割も担っていたといえる。

類家組が休止した1967(昭和42)年、この時期の八戸市は新産業都市に指定され、工業都市として一段と発展していた。中心市街地近郊の類家地区は、都市化によって住民のサラリーマン化が進み、以前ほど現金収入に困らなくなったと考えられる。えんぶりで現金収入を得なければ、生活が成り立たない時代ではなく、えんぶりに求められた相互扶助の機能は次第に不要になったものとみられる。

類家組と同様に多くの組が休止し、1953(昭和28)年に71組も豊年祭に参加していたが、約20年で50組減少し、72(昭和47)年には21組になった。危機感を抱いた関係者は、子どもの育成や女性の参加を奨励するほか、観光客誘致や文化財指定に向けた施策を展開していったのである。



商店で門付けをするえんぶり組 1968(昭和43)年2月・和井田登さん撮影・八戸市博物館所蔵